

攪乱され続ける対立—「文学」と「論理」をめぐる

東京大学大学院教育学研究科教授
隠岐 さや香



二〇一八年に文部科学省が、国語科目を「文学国語」と「論理国語」に分けるとの方針を明らかにしたあと、「文学」と「論理」が分けられるのかという論争がメディアやSNSなどで起きた。とりわけ「論理国語」にいかなる類の文章が配置されるのかについては憶測が飛んでいた。

いわゆる文学作品が「文学国語」という枠組みに入れられてしまう場合、多くの高校生がそれに触れる機会を失うのではとの懸念も見られた。私もその想いを共有した一人であった。なので、新設された「論理国語」の教科書に自分の書いた『文系と理系はなぜ分かれたのか』（星海社新書）という本の一節が掲載されるかもしれないと知ったときは、いささか戸惑いを覚えた。

ところで、「文学」と「論理」について人々が言い争うという現象は「文系と理系」の問題ではないが、それと全く無関係なわけではない。というのも「どのような文章を望ましいものとするか」は昔から人々の関心を集める話題であり、数学や自然科学・工学を重視する人々がその論争に介入することもあったからだ。

フランス人作家で文学研究者のウィリアム・マルクスによる『文学への憎しみ』(La haine de la littérature) という書がある。同書が書かれたきっかけは、フランスのニコラ・サルコジ元大統領が、公務員試験の一般教養問題で古典文

学「クレューヴの奥方」について問うのは無意味だという趣旨の発言を繰り返したことであった。その発言は同大統領における人文系軽視の風潮と結びついていたため、教師や文学研究者らが「反発を示した。本書はその一例である。」

マルクスは、西洋世界において常にある種のテキストが軽蔑され、攻撃されてきたと論じる。彼は便宜的にそれらを「文学」と読んでいるが、その実態は多様である。それらは、大衆演劇であったり、現実逃避的な物語、あるいは不道徳とされる小説であったりした。

一番古い論争として想起されるのは、紀元前五世紀を生きた哲学者プラトンによる「詩人追放論」である。『国家』という書においてプラトンは理想の国家とそれを治める理想的な王者の教育方法について論じるのだが、そこでは未来を担う若者の教育にとって詩が有害なものともみなされ、詩人の追放が主張されるのである。同書によれば、詩には現実ではない虚構の出来事を語って感情を過剰にかき立てる作用があり、心の未熟なものには有害だという。それに対し、哲学は真理を語ることの出来る言葉とされた。

ここで補足すると、当時の「詩」は基本的に韻律を伴う文章であり、散文ではない。また、その内容も物語的なものが多く、朗読や音楽的な表現、舞踊とともに楽しまれることがあるなど、演劇的要素を備えていた。他方、「哲学」には倫理的な議論だけでなく、自然科学的な内

容も含まれていた。たとえばプラトンは、前述の『国家』で一つの国を船にたとえた上で、哲学者のことを「星を見つめる男」、すなわち天体観測をして船の位置や進路を見極めることのできる人物になぞらえている。

筆者の知る限りでも同様の論争は歴史上反復されてきた。近世には、自然科学の発展に感化された人々を中心に科学的で明晰な文体を是とする主張が現れた。その典型例が一七世紀のジョン・ロックである。彼は明晰で簡潔な文体を評価する一方、装飾的な比喩表現を多用する詩的な文体を直感的に訴えるだけの浅薄なものとして批判した。当時は科学と哲学がまだ分かれておらず、ニュートンでも己を「自然哲学者」だと自負していた時代である。自然哲学としての科学に文体の模範をみるロックの主張は「詩人追放論」の変奏曲といえる。そしてこのような主張に皮肉をもって応戦したのが『ガリヴァー旅行記』の著者、ジョナサン・スウィフトであった。同書の「ラピュタ」（飛ぶ島）を扱った箇所では、数学的对象に関する表現は豊富だが、想像や空想をうまく扱えない人々が登場する。スウィフトは「論理」の支持者が展開する議論に対し、「文学」を通じて一撃を与えたのである。

そして、近代化にあたり西洋の学問を輸入した我々も、部分的にせよその対立を引き継いでいるのだろう。特に「論理国語」として実際に選ばれた文章に、哲学や社会科学のテキストが相当数みられたことは、この「文学」と「論理」の摩擦が遠い過去より続く論争の延長線上にあることを示唆している。

とはいえ、対立を煽る人々がいる一方で、それをものともせず裏切っていく人々がいるのも事実である。一八世紀のフランスに視点を転じると、同国では「詩（文学）」と「哲学」の対立構造を攪乱するような文芸作品が数多く存在した。とりわけ、「哲学的物語」と呼ばれるジャンルがそれにあたる。要は哲学者が自らの主張と共に筋書きを展開するフィクションである。それらは小説というには人物描写等の深みに欠けるものが多いが、切れ味鋭い喜劇的なアイロニーをもって雄弁に主張を伝えた。たとえば、モンテスキューは『ペルシア人の手紙』で遠い国の王宮のスキヤンダルを語るふりをしてフランス王政の腐敗を風刺したし、ヴォルテールは『カンディッド』で残酷な目に遭う登場人物描写を通じて宗教的不寛容や奴隷制の問題に触れている。

更には、実は「詩人追放」を論じた当のプラトン自身の語りも、皮肉なことに物語的（詩的）といえなくもない。というのも、『国家』はソクラテスとその弟子達が対話を繰り返して

る演劇台本のような体裁で書かれており、読者は論理とは関係のない情報も受け取る。たとえば、ソクラテスが祭りに行こうとする途中で呼び止められたとか（『国家』冒頭）、民衆の扇動で裁判にかけられた上に死刑に処せられ、弟子達に死を恐れぬ態度を見せて感銘を与えた（『パイドン』）といった具合にである。そして、哲学的な対話を模したプラトンの文体は後に「対話篇」と呼ばれたが、そのジャンルの位置づけは曖昧である。事実、プラトンの弟子にあたるアリストテレスは、『詩学』という著作の冒頭において「対話篇」があたかも創作（詩学）の一種であるかのように言及している。

「論理」と「文学」の切断を主張する人々は、多くが「論理」側の擁護者であり、その逆の事例は少ない。彼ら彼女らは、「文学」があまりにも情緒的なので、忙しい現代人の貴重な学習時間を割り当てるには及ばないものだと言張する。だが、実際に出来上がった「論理国語」の教科書は当初予想されたよりも雑多なジャンル（小説も含む）で構成されている。

恐らく、「論理」を「文学」から切断しようとする人達が考える以上に両者の境目は曖昧なのだ。実際、区別がなされた途端にどこからともなく両者を越境する者が現れ、対立構造を攪乱していく。従って、「論理国語」の異種混交的な有り様も、過去の対立と同様、必然の成り行きを辿っているのだろう。